

# 若者へのメッセージ 35

東京大学名誉教授

山内 昌之

## 【第二回】ホトトギスの句 ——人間の性格とは何か

皆さんも歴史上の人物で好きな人がいるでしょう。たとえば、信長・秀吉・家康のなかで誰か好きな一人を選べと言われると、意見も分かれるはず。こうした評価を通じて、皆さんと一緒に歴史を見る眼、現代を考える視点を鍛えていきましょ。

### 有名な三句からのイメージ

日本史上の重要人物の性格をホトトギスに託して言い当てた句がある。皆さんも知っているように、それは次に挙げる有名な三句である。

「鳴かぬなら殺してしまえホトトギス」

（織田信長）

「鳴かぬなら鳴かせてみせようホトトギス」

（豊臣秀吉）

「鳴かぬなら鳴くまでまとうホトトギス」

（徳川家康）

きで、どの武将をひいきにしているだろうか。

この三つは、信長の果敢と決断力、秀吉の叡智と発想力、家康の温和と忍耐力を言い当てた句とされてきた。三人は或る年の四月に同席して、ホトトギスが鳴かないのを不愉快に思い、句で自分の胸の内を明かしたという。残念ながら、三人が本当にこれらの句を同じ時に詠んだという確証はない。それでも、この句が現代まで伝えられてきたのは、三人の性格や人柄をよく表しているからだ。

もっと正確にいうと、中世末期から近世初期にかけて活躍し、戦国時代の無秩序や混乱にピリオドを打った三人について、今に至るまで日本人が何となく想像してきた三人の個性を巧みに表現したために、逆にこの句から歴史の実在としての信長・秀吉・家康のイメージが固まっ



信長の句が表しているのは、一度決断したら自分の思いを必ず実行する覚悟であり、思うようにならない時には相手を殺害しても決意を思い知らせる信長の強い意志力である。ただし、その決意はしばしば残酷さに結びついた。秀吉の句は、いろいろな困難や試練を自分の知恵と才覚で乗り越えようとする賢さを示すのだろう。そして、家康の句には、子どもの時に父を殺害された自分も駿河（いまの静岡県）の今川義元の人質になった苦勞人らしい家康の経験がおのずから滲み出ている。さて、皆さんはこの句が好

たともいえる。皆さんも私も、この句を通して三人の天才的政治家のイメージを描いているのだ。

### イメージと史実の違い

実際には、イメージと歴史的事実（史実）との間にはズレがある。頭の中で想像をめぐらす人物の像と、歴史的に活躍した事実から浮かび上がる人物の像はピッタリと重ならないことも多い。短気とされる信長が戦では敵わぬと見た武田信玄や上杉謙信相手に、言葉を和らげて下手に出る粘り強さを発揮したものだ。

また、知恵と着想で備中高松城を水攻めにし、理屈や損得を説いて敵将・清水宗治を切腹させ敵味方の犠牲を最小限に留めた秀吉には、甥の関白・豊臣秀次の一家を滅ぼす冷酷さや、隣国朝鮮に対する大義のない戦争で日本の兵力や国富を使い果たすなど、理性を欠く行動も見られた。

家康にしても、戦場に立つと意外と短気な面を見せた。思うように戦が運ばないと爪を噛むクセを抑えられなかった。

こうしてみると、ホトトギスの句にまつわる逸話は事実とはいえず、三人の性格をすべて正しく表したのではない。それでも、三句は三人の有名武将の果たした歴史的役割や人格的感



山内 昌之（やまうち・まさゆき）

東京大学名誉教授、歴史学者（専攻は中東・イスラーム地域研究と国際関係史）。

1947年、札幌市生まれ。71年、北海道大学文学部卒業、同大学院で文学修士、東京大学大学院総合文化研究科で学術博士を取得。カイロ大学客員助教授、東京大学教養学部助教授、トルコ歴史協会研究員、ハーバード大学客員研究員、東京大学大学院教授を経て、2020年に東京大学を定年退官。

現在、武蔵野大学国際総合研究所特任教授、ムハンマド5世大学（モロッコ）特別客員教授。政府・アジア文化交流懇談会座長、国家安全保障局顧問会議座長、日本相撲協会・横綱審議委員等。

著書に『スルタンカリエフの夢』（サントリイ学芸賞）、『瀕死のリヴァイアサン』（毎日出版文化賞）、『ラディカル・ヒストリー』（吉野作造賞）など多数。

2002年、司馬遼太郎賞受賞、06年、紫綬褒章受賞。

化力の強さを一般的に言い表したかったのだろう。

皆さんや私などの現代人も、時には真面目に時にはふざけて、実在する政治家などの有名人はもとより、話題となったドラマの主人公・半沢直樹の行動や性格を、彼ら象徴する言葉や身振りや表すことがある。ホトトギスの句は、いわばドラマの決めセリフのようなものかもしれない。

さて、皆さんはホトトギスの句の中でどれがいちばん好きだろうか。この場合、句が好きだから、この人物が好きだという人もいるだろう。しかし、信長・秀吉・家康のうち、ひいきの武将・政治家だから、その句が好きだという人もいるに違いない。

三つの句がうたわれた時、同席していた者が別の句を詠んだという説がある。

「鳴かぬなら鳴かぬのもよしホトトギス」

これは里村紹巴という連歌師の作品だといふ。家康の「鳴くまでまとう」という忍耐力や、秀吉の「鳴かせてみせよう」の発想力とも違い、動物愛護を無理なく受け入れる現代人の常識力に通じるところがある。生物をその場所においてありのままに受け入れる句には、英雄たちと異なる普通の優しさもあり、意外と皆さんも共感できる句ではないだろうか。